

内田 樹『増補版 街場の中国論』
(株)ミシマ社 2011年初版)

柴田 秀一*

「はじめに」

2019年前半の海外ニュースは中国を巡る問題に明け暮れた。アメリカとの貿易摩擦と関税を上げていく掛け合いは「チキンレース」と言われた。特に中国のファーウェイ（華為技術）に対するアメリカの強硬措置はカナダを巻き込んだ問題となった。史上初の首脳会談から進展がなかった米朝関係も、間に中国が入り、中朝会談をし、G20の後、アメリカ・トランプ大統領、北朝鮮・金正恩、両首脳がともかくもパンムンジョム（板門店）で会った。

そんな中国のニュースが多数駆け巡るなか、少し古い出版ではあるが「街場の中国論」を手を取るきっかけとなったのは、香港のデモであった。「逃亡犯条例」廃案を目指し3月から始まった香港の市民デモは、この稿を書いている7月時点でまだ続いている。香港行政長官自身は混乱の責任を取って辞意を固めたが、中国政府は辞任を許さないというのがメディアの見方だ。香港はイギリスから中国へ返還され今年で22年。そもそも香港は、中国とイギリスとの戦争、イギリスが身を亡ぼす物を中国に売りつけておいて国を亡ぼすひどいことをした「アヘン戦争」（第1次1840～42年・第2次1856～60年/アロー号戦争）でイギリス領（一部に99年租借地域）となった。

本書の「もし、アヘン戦争がなかったら」という章が目をついたからである。

【本書の構成】

I 街場の中国論

- 第一章 尖閣諸島・半日デモ・中華思想
- 第二章 中国がうしないつつあるもの
- 第三章 向きで、日本で何か問題でも？

II 町場の中国論 講義編

- 第1講 チャイナ・リスクー誰が十三億人を統治できるのか？
- 第2講 中国の「脱亜入欧」
- 第3講 中華思想 — ナショナリズムではない自民族中心主義
- 第4講 もしアヘン戦争がなかったら — 日中の近代化比較
- 第5講 文化大革命 — 無責任な言説を思い出す
- 第6講 東西の文化交流 — ファンタジーがもたらしたもの
- 第7講 中国の環境問題 — このままなら破局？

*しばた しゅういち 日本大学法学部新聞学科 教授

第8講 台湾 — 重要な外交カードなのに…

第9講 中国の愛国教育 — やっぱり記憶にない

第10講 留日学生に見る愛国ナショナリズム — 人類館問題をめぐって

「講義録と加筆の新版」

著者、内田 樹氏は、「街場の…」と題する本を15冊以上書いている。本書は、「街場」シリーズでは初期の2007年に大学院の講義録の形で出版したもの（Ⅱ街場の中国論講義編）に、4年を経過して新たに「Ⅰ 街場の中国論」3つの章を加筆した形になっている。ちょうど尖閣諸島問題で中国船が多数押し寄せた時期で、ヘイトスピーチも行われた時であるのでそういう内容になっている。

講義録の方は口語なので読みやすく分かりやすい。大学院の講義だが、まさに「街場」という題にふさわしい親しみ易さだ。

しかし、氏の大学の研究はフランス現代思想である。曰く、「全員が中国問題の素人で、みんなでああでもないこうでもない素人考えの床屋政談で、専門家のバイアスを超えた画期的な中国論を展開しよう」というものだそうだ。とはいえ、中国のことは専門家にお知り合いがいらして、よくお聞きになっていることと、日ごろからよく調べていらっしゃるのは分かる内容だ。小職など及びもつかない。

「私は中国の専門家ではないので、知識の量は平均的な日本人の標準からそれほど外れていないだろう」とおっしゃり、では、この本はどのような読者を対象にするかといえば、「他国の国際戦略や国民性についてあまり大きな間違いをしないで考察する方法とは、どういうものだろう」と思っている読者がいたら、そういう人たちにとってそれなりに有用ではないか」と述べていらっしゃる。

新版で新しく足された第二章の中に「北京オリンピックに思うこと」という文章がある。2008年開催の北京オリンピック直前の状況について、友人のビジネスマンの言葉を借りて「中国人が北京オリンピックで失うものは、日本人が東京オリンピックで失ったものの十倍規模になるだろう」と言わしめている。氏も実感としてそれに近い。そういう時は、形として失うものより形のないものを失う。中国の場合失ったものは、「貧しさと付き合う知恵」と指摘する。当時オリンピック競技場や周辺道路の整備で、中国古来の街並みであるフートン（胡同）が壊されるのをビデオで何度か見た。これは形が失われていくが、フートンの暮らしの知恵もまた、失われていくのではないか。

この後2010年のGDPで中国は日本を抜いて世界第2位になる。豊かになった人たちは日本に来て爆買いをした。高級電気釜が飛ぶように売れた。日本は潤ったが、あの爆買い「モノ消費」は、今は影を潜め、今度は日本の自然に親しみ、文化に触れる「コト消費」になっているというが、人民元と円の為替関係でも（元が安くなれば）そうならざるを得ないのだろう。

また、中国を見るときに、日本のメディアで語られる嫌中国論では、日本の様に民主的でない、安定していない、環境保全がない…と日本と比べて論で語られるのを、氏は「そんなこと言っても仕方がない。違う国なんだから。どんな国になるか予測もつかない国なのだから。」この本では底流に「中国はどのような風に苦しんでいるのか」というテーマをもって、無数のリスクファクターを抱えこんだ、前代未聞の巨大国家の統治に中国人はどんな風に苦しみ、ガバナンスの維持のために

相違工夫を凝らしているのか、それを知りたいと思ったという。

「もしアヘン戦争がなかったら」～「文化大革命」

首相が靖国神社を参拝したり（昨今はない）、歴史問題で自国の過去を正当化する意見が出ると、友好関係にひびが入る。これは仕方がないことかもしれないが、何で、何度も、何度もそういうことが起きるのか、何故、政治家の発言や行動で、第二次大戦前のような軍国主義はそう単純に起こり得るものではないのにと、日本人は思うし、小職もそう簡単には起きないと思っているが、何故中国の人たちは絶対にそれを許さないのか。

それが「中国人のトラウマ」という題の「第5講 文化大革命」に出てくる。

氏は、フロイトのトラウマを説明、絶えず「そこ」に引き戻される経験で、悲惨な体験が「トラウマ」であるとしたら、反対に、ある「成功」体験が絶えず人を「そこ」に引き戻すということがあるという。

上手くいったという体験が、トラブルが起きるたびに、あの時「これでうまくいった」という経験を機械的に呼び戻してしまうというのだ。中国の場合、近代ではそうした成功体験がほとんどなく清朝後期から第二次大戦までの100年近くでは、唯一あるのは、1937年抗日統一戦線結成から中華人民共和国建国、朝鮮戦争に勝利する1955年迄の期間という。中国国民が過剰とも思える激しい軍国主義への反応を示すのは、「抗日民族戦線の結成による日本に対する勝利という原点に国民的な規模で立ち戻るといふ、ある種の心理劇を演じるということ、過去100年で抗日戦線だけが唯一の国民的統合の記憶なのだといふ。だから、「国民的統合に危機的兆候が見えたり、体制の矛盾が露呈したり、投資指導部の力が落ちたり」したら、要人たちはとりあえず『抗日統一戦線』の記憶を掻き立てようとする」のは心理的には自然なことである。

と、説明されると。なるほど腑に落ちる。

そして、その100年は、アヘン戦争から数えてほぼ100年間つまり、「もしアヘン戦争がなかったら」という項にひかれて読みだした本書は、そこに近代中国の翻弄された歴史の原点がある訳である。ただ、「アヘン戦争」がなかったら日清戦争、第一次大戦、第二次大戦がなかったとも言えず、または中華人民共和国は成立しただろうか、少なくとも香港は割譲されないだろうが、…

今年、天安門事件30年、初めに書いたように、香港は返還22年だが、行政庁と市民の対立が深まっている。その決着がどう着くかによって本国中国の指導体制にも影を落とす。おりしも更に、中国の経済成長率が、統計を取り始めた1992年以来最も低い数値(6.2%)となったというニュースが入ってきた。米中貿易問題の影響かと今年後半の不安材料でもある。

著者紹介

内田 樹 (うちだ たつる)

1950年東京生まれ 東京大学文学部仏文科卒、東京都立大学大学院博士課程中退、神戸女学院大学文学部教授から2011年4月同大名誉教授で現在に至る。専門はフランス現代思想、武道論、教育論、映画論など。著書は多数、「街場」シリーズ以外に「私家版・ユダヤ文化論」(第6回小林秀雄賞受賞)、「日本辺境論」(2010年新書大賞受賞)、伊丹十三が才能を発揮

した分野において、優秀な実績をあげた人に贈る「伊丹十三賞」第3回受賞。神戸市で武道と哲学のための学塾「凱風館」を主宰。